

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤスィックアケルの奮い空 21

脱出行

旅慣れたドライバーたちはこういう時には本当に頼りになる。「駐車場に車をとめて、建物から外に出さえなければ問題ない、任せておけ」と、渋るヌルさんを説得した。ヌルさんとしてはここからさらに30kmほど進んだところにテントを張って泊まるつもりでいたようだが、車が故障、この先直すこともできないとなれば仕方ない。ドライバーの仰せに従うしかない。

そんなわけで、結局我らは普通では踏み込むことのできないはずの禁断の場所で一夜を過ごすことになった。ただし、一切外へ出てはいけぬ。もちろん写真などは御法度である。10:30 町の中にある1軒の招待所に駆け込む。かつてカシタシ遠征の時に泊まった招待所に比べればはるかに上等だ。急に飛び込んだ我らのためにこの時間でも夕食を用意してくれるという。その料理は鶏肉をメインにしたもので、味は辛めで、小生には「好吃」であった。最初は躊躇し、困った様子だったヌルさんだったが、そうと決まれば、腹をくくった様子。興味深そうに結構楽しんでいる節も感じられた。

食事が終わったあと、久根さんはねじりはちまきで日本へ送る隊荷のパッキングリストの作成をしている。本当はみんな興味津々でパチパチと写真を撮りたいところだが、もし万が一見つかったらどうなるかわからない。とても「よいこ」の登山隊でありました。ついでに言えば、大紅柳灘とここ三十里営房の間には先に書いたようにインド国境へと続く軍用道路があって、その両サイドをこの二つの兵站でがっちりブロックしているという趣だった。朝から軍用ヘリが飛んでいたり、大きなレーダーが稼働していたり、まさに最前線の基地であった。二つの基地の間にはカンシワ峠という5000mの峠があるのだが、その脇に6500mほどの極めて魅力的な氷河を抱いた岩峰があった。車の中から三戸呂君と「登攀意欲をそそるいい山だねえ。」と眺めていると、ヌルさんから「そうでしょう。カンシワ峠といいます。でも絶対に許可おりませんよ。この場所はそういう場所です。」と言われた。でも夢は持ち続けることが大事。もし何かの事情で許可が下りれば登ってみたい、本当にそう思わせる山だった。

招待所のベッドは4つが一組になった硬いもの。誰かが寝返りを打つたびに地震かと思うほど揺れる。しかし、屋根の下であるというだけでも儲けもの。おまけに夜半過ぎからは雨が降り出していたことを考えれば贅沢はいえない。

明けて8月12日、久しぶりの屋根の下での一夜を過ごし、朝起きて外のトイレに行くと、その脇にある駐車場では、ドライバー達がトラックのまわりに集まっている。何でも昨日故障したクラッチはつながったものの、今度はフロントキャブのおさえのフックが外れてしまったとのこと。元整備士だったという秦ドライバーが番線で留めている。荒っぽい直し方で不格好だが、なんとか走れる状態にはなった。

そんなこともあって出発は7:40。雨模様で、道はぬかるみはじめ、サイドの山からの水が洪水に拍車をかけて至る所で道を塞いでいる。標高があがると、雨は雪交じりともなった。そんな道をなんとか凌いで進んでいったが、10:00 右の氷河から流れてくる沢

の中で、先頭に行くニッサンパトロールがマフラーまで完全に水没し、エンストしてしまった。エンジンをガソリンからガスに切り替えたのだろうか、秦ドライバーが悪戦苦闘の末、なんとか脱出。それを見ていた他の車も一気に通過することで事なきを得た。しかし、暫く進むと今度はトラックのロッカーアームが石で曲げられてしまった。ここはどうするのかと思って見ていると曲がった箇所をジャッキアップして、上げておいてから石を交い、トラックそのものの自重で直そうという（右写真参照）のだ。なんという荒療治。JAFもなく、だいたい人が住んでいないところなのだから、故障してもドライバーたち自らが知恵と経験で直すしかないのである。そして、そういうドライバーでなければ、この道を運転する資格はないのだ。



しかし、トラブルはこれで収まらない。僕らの車が快調にヘイカ峠を下って峠下で待っていると、1時間たってもパトロールは来ない。あとで聞いてみると、峠の登りで右前輪のブレーキが不調を来し、9mm?のボルトを換えるため、牽引フック他から外して交換をしていたとのことだった。さらにさらにパトロールの方は、雨が降り出すと、これまで使うことの無かったワイパーまでもが故障。これがこの先運転手を苦しめることとなった。「フロントガラスは、超撥水処理をしてある訳でもないし、油膜取りが上手くできている訳でもないで、雨粒が当たると、部分的に油膜ギラギラで見にくいこと夥しい。座席を目一杯前に出し、時としては窓から手を出し布でフロントガラスを拭きながらの運転には感心させられた。」とは、パトロールに乗っていた松田さんの言。明るい内はまだしも、暗くなってからは見づらは一層増し、運転するのが辛そうであったとのこと。何度か修復を試みたが、どうも電気系統の故障のようで、手に負えない様子だったようだ。

14:50 ようやくマザーに到着。ここで「サオメン」を食べる。これは短く切った麺を日本の焼きうどん風に炒めたもので、とても美味しかった。遅い昼食で腹ごしらえを済ませ、16:20 マザーを出発。セラック峠を越えたあたりから天気はますます悪くなった。そんな天気の中、4200mの高所で三菱パジェロがパンク。こんな調子で休んでは進み、進んでは休むの繰り返し。天気がよければ僕らはのんびりと景色でも眺めていればよいのだが、あいにくの雨、峠では小雪が舞うという天気。

20:00 によりやく軍の検問所のあるクディに到着した。ここでは入域の時同様に通過のチェックが行われる。土砂降りの中戸外で随分待たされた上、チェック時には担当兵士は人の顔をチラチラ見、口笛を吹きながらパスポートと照合している。今回のチェックは極めて不愉快だった。軍人がすべてそうというわけでもないだろうが、その一端を見たような気がして不快だった。